

英雄と運命
——あるいは、ニーチェの「英雄的性質」について——
Heroes and Fate
or
On Nietzsche's "Heldenzug (Heroic Trait)"

岸 貴介
Takayuki KISHI

Abstract

In this article, I search for the basis of Nietzsche's philosophy from his own view of 1882. In his letter¹ presumably of 16 September 1882 to Lou von Salomé, he confesses that her "Gedanke einer Reduktion der philosophischen Systeme auf Personal-Acten ihrer Urheber (idea of reducing philosophical systems to the status of personal records of their authors)" is also his own and considers that the "„Charakteristik meiner selber" (Characterization of Myself)" is "wahr (true)". If we accept this fact, his philosophy must be based on this "Charakteristik". With the texts of Salomé and Nietzsche at that time as a clue, I infer that the key word of this "Charakteristik" is "Heldenzug (heroic trait)" and what this expression means. Then I reinforce this conclusion with his other texts and relate it with a few other important concepts of his philosophy, especially with "amor fati (love of fate)". Finally I consider whether his way to say Yes to the fate is applicable to us, and whether there are other ways.

・ キーワード：ニーチェ、英雄的性質 (Heldenzug)、運命

【註】ニーチェ (NIETZSCHE, Friedrich Wilhelm) のテキストは以下のグロイター (Gruyter) 版を用いた。

- ・ *Nietzsche Werke*. Kritische Gesamtausgabe, herausgegeben von Giorgio COLLI undazzino MONTINARI, Walter de Gruyter, Berlin und New York, 1967ff. (略号 KGW)
- ・ *Nietzsche sämtliche Werke*. Kritische Studienausgabe in 15 Bänden, herausgegeben von Giorgio COLLI undazzino MONTINARI, Walter de Gruyter, Berlin und New York, 1980, 2., durchgesehene Auflage, 1988. (略号 KSA)
- ・ *Nietzsche sämtliche Briefe*. Kritische Studienausgabe in 8 Bänden, herausgegeben von Giorgio COLLI undazzino MONTINARI, Walter de Gruyter, Berlin und New York, 1986. (略号 KSB)

引用・参照指示は、著作は KSA の略号と巻数・頁数を、遺稿断章は KGW の部門番号と断章番号を、書簡は KSB の略号と巻数・頁数をそれぞれ併記し、その都度行う。但し本稿のモットーは例外的に、KGW の略号と部門番号・巻数・頁数を併記して記した。

また、ニーチェ以外のテキストも含め、原文中の強調は全て傍点による強調に改め、省略は [...] で表示し、筆者による補足は [] で括った。更に、改行は適宜 / で表示した。

¹ 当該書簡の英訳は次のものに従った：MIDDLETON, Christopher (ed. and trans.), *Selected Letters of Friedrich Nietzsche*, The University of Chicago, 1969, reprinted by Hackett Publishing Company, Inc. Indianapolis / Cambridge, 1996, pp.192f.

悲劇の英雄は、運命との戦いの中で自らを証明するのではない。
[...] 認識したばかりのこの恐ろしい世界を前にたたずむ彼の、
慰めには与れぬが気高き姿が我々の魂に [...] 突き刺さるのだ。
(KGW.III 5/1.667: Vgl.KSA1.546)

I. はじめに

本稿が試みるのは、ニーチェ哲学の基盤を 1882 年の資料から導出し (II ~ VI)²、それが主要な主題に妥当することを指摘 (VII) した上で、疑問に応答する (VIII・IX) ことである。

II. 「ニーチェの理想的な解釈者」

ニーチェ研究者でもある清水真木氏は、ニーチェ解釈にとってのルー・ザロメ (Lou von Salomé) の重要性を次の通り述べている。

「[...] ルー・ザロメ [...]こそ、[...] 自らがニーチェの理想的な解釈者であるとニーチェ本人に認めさせたただ一人の人物であった。特に重要なのは、彼女のニーチェ論『作品に現れたフリードリヒ・ニーチェ』[...]」³の最初の三分の一である。なぜなら、この箇所の草稿は、彼女がニーチェと知り合った年の夏、ニーチェの前で彼女自身によって朗読され、ニーチェによって絶賛されているものだからである。」⁴

実際、ニーチェはザロメを高く評価している。二人の交流は決して長くはない⁵が、それにも拘らず、彼女への高評価は当時の彼の書簡から明瞭に読み取れる。

「当時⁶オルタ (Orta) で私は、貴女を一步一步私の哲学の最終的結論にまで導く見通しを得たのです——貴女はそれにふさわしいと私が見做した最初の人でした。[...] / ——私は貴女を私の相続人と考えたのです——」 (KSB6.296)⁷

では、彼が「私の相続人 (mein Erbe)」とすら見做したザロメは、一体如何なる点で「ニーチェの理想的な解釈者」なのか。換言すると、彼女のニーチェ解釈のうち、ニーチェ本人が言わばお墨付きを与えたのは一体如何なる点に対してか。

² この作業は筆者の学位論文の第五節・第六節に主に基づき、これを改稿したものである。

³ ANDREAS-SALOMÉ, Lou, *Friedrich Nietzsche in seinen Werken*, Konegen, Wien, 1894. 以下、同書は『作品』と略記し、引用・参照指示は次の版を用いて、頁数を併記してその都度行う。mit Anmerkungen von Thomas PFEIFFER, herausgegeben von Ernst PFEIFFER, Insel, Frankfurt am Main und Leipzig, 2000.

なお、同書は「序言としてのフリードリッヒ・ニーチェの一書簡」・「第1部 彼の本質」・「第2部 彼の変遷」・「第3部 『体系ニーチェ』」から成る。即ち、清水氏が「特に重要」と見做すのは同書の第1部である。

⁴ 清水真木『知の教科書 ニーチェ』、講談社、2003年、11頁

⁵ ニーチェとザロメの二人は1882年4月26日に出会い、11月5日を最後に二度と会わなかった (JANZ, Curt Paul, *Friedrich Nietzsche. Biographie*, in 3 Bänden, Hanser, München / Wien, 1978-1979, Bd.2, 1978, S.122f.、『作品』303)。また、書簡のやりとりの形跡も12月までである。

⁶ パウル・レー、ザロメの母も含む四人で1882年5月5日～8日頃に行われた旅行を指す。

⁷ ザロメに対するニーチェからの当時の高評価は、例えば次の箇所でも確認出来る：
KSB6.222,224,255f.,276.

III. 「人物調査書類」

ザロメは自身のニーチェ論で、ニーチェからのお墨付きを明示すべく、その序文に代えて、彼からの書簡の一部を「序言としてのフリードリッヒ・ニーチェの一書簡 (Ein Brief Friedrich Nietzsches zum Vorwort)」として掲載している (『作品』24f., 298f. : Vgl. 註 3)。これは、彼女からの現存しない書簡に対し 1882 年 9 月 16 日にニーチェにより作成されたと推定されている返信の一部であるが、そこには次の一節が含まれている。

「ルーさん、哲学的体系をその創始者の人物調査書類に還元するとの貴女の考えは、まさに『兄妹の頭脳』から出た考えです。[...] / [...]

貴女の『私自身の性格描写』について言えば、貴女が御書きの通り本当です [...]」
(KSB6.259f.、『作品』24, 298f.)

ここで、「貴女の考え (Ihr Gedanke)」と「『私自身の性格描写』 („Charakteristik meiner selber“)」との双方に対して、ニーチェは肯定的に反応している。つまり、彼の考えでは哲学は哲学者の「人物調査書類 (Personal-Acten)」に基づくものであった。その場合、「人物調査書類」とは如何なる意味か。引用を一部、割愛部分も含めて提示してみる。

「 [...]『兄妹の頭脳』から出た考えです。僕自身、バーゼルではこの意味で古代哲学史を講じていたのであり、好んで聴講者に次のように言っていたのです。『この体系は論駁されており死んでいる——だが、体系の背後にある人格 (Person) の方は論駁不可能なのであり、人格が殺されるということは全くあり得ないのだ。』」(KSB6.259) ⁸
彼が認定しているのは、哲学は哲学者の人格に基づくということである。故に、彼の見解に従えば、彼の哲学は彼の人格に基づくものとして理解されるべきである。⁹そして、彼は

⁸ 実際、草稿「ギリシア人の悲劇時代における哲学 (Die Philosophie im tragischen Zeitalter der Griechen)」の序文には次の箇所がある。

「ところで、哲学的体系はその創立者にとってのみ全く真である。つまり、それらの体系は、後のあらゆる哲学者にとっては通常一つの偉大な誤謬で [...] ある。[...] およそ偉大な人間に喜びを覚える者は、仮令その人間が持つ体系が全く誤っていたとしても、その体系にも喜びを覚えるものである。何と言っても、それらの体系は、全く反駁されない一点を、つまり、個性的な雰囲気や色彩というものを具えているのであり、それらの体系は、哲学者の像を獲得する為に利用することが出来るのだ。丁度、或る土地に生えている草木から土壌を推測することが出来るように。」(KSA1.801)

また、後に作成された(第二の)序文の主旨も、これと同様のものである。

「[...] 反駁されている体系で我々の関心をそれでもなお惹くことが出来るのは、個性的なもののみ [...] である。これは永遠に反駁不可能なものだからである。」(KSA1.803)

⁹ 故に例えば、清水氏も述べる通り(清水真木『岐路に立つニーチェ——二つのペシミズムの間で——』、法政大学出版局、1999年、7頁、191頁)、ニーチェの哲学を扱う際に「『人物』の無視」や「人間性の表現として[...]見られる限りでの『作品』の度外視」(HEIDEGGER, Martin, *Nietzsche*, Bd.1, Neske, Pfullingen, 1961, S.474.)を方針とするハイデガーの立場は、ニーチェの立場に反する。つまり、ニーチェ哲学の適切な理解は、ハイデガーのみならず例えばヤスパーズやフィンクやミュラー=ラウターも、「心理学的な

(psychologisch)」(ibid., S.18, 475.; JASPERS, Karl, *Nietzsche: Einführung in das Verständnis seines Philosophierens*, Walter de Gruyter, Berlin, 1936, dritte unveränderte Auflage, 1950, S.13.; MÜLLER-LAUTER, Wolfgang, *Nietzsche: Seine Philosophie der Gegensätze und die Gegensätze seiner Philosophie*, Walter de Gruyter, Berlin / New York, 1971, S.5.) 観点・「心理学 (Psychologie)」(FINK, Eugen, *Nietzsches Philosophie*, Kohlhammer, Stuttgart, 1960, S.12, 124, 130.)の観点を批判しているにも拘らず、寧ろ、一種の心理学的な観点からこそ為されるのである。その点、例えば和辻哲郎

先の書簡で、彼女による「私自身の性格描写」が「本当 (*wahr*)」であると認定しているのだから、結局、彼は彼の哲学が「私自身の性格描写」に基づくと認定しているのである。

恐らくザロメは、この考えを念頭に置きつつ自身のニーチェ論を作成した。と言うのも、その第一部の冒頭直後で彼女は次の告白をしているからである。

「そもそも伝記作家の課題が思想家を人物により解明することであるならば、このことは並外れて高い程度でニーチェに該当する。外面的な精神的作品と内面的な生の像がこれほど完全に一つに重なることは他の者の場合には無いからである。[…]

そうして、以上はまた、前述の書簡 [=「序言としてのフリードリッヒ・ニーチェの一書簡」] で言及されている、ニーチェの性格描写についての私の草稿、これを導いている考えでもあったのだが、この草稿を私は前もって1882年10月に彼に読み聞かせ、それについて彼ととことん話し合った。[この] 仕事はあらまし、本書の第1部と第2部の若干の節とを含むものだった […]」(『作品』29f.)

IV. 『私自身の性格描写』

では、ニーチェが「本当」であると認定した「私自身の性格描写」に『作品』第1部は属すと、そのように言ってよいだろうか。この点は注意せねばならない。何故なら、「私自身の性格描写」が1882年9月16日頃以前のものであるのに対し、ザロメの告白で言及されている「ニーチェの性格描写についての私の草稿」の方は「1882年10月に彼に読み聞かせ」たものとされているからである。

同年夏、二人（及びニーチェの妹）はタウテンブルク (Tautenburg) で8月7日から26日まで共同生活を行い、二人は「一日中朝から晩まで […] 話をして」・「この3週間は文字通り死ぬほど話をした」¹⁰。その後二人が会ったのは、10月1日にザロメがパウル・レー (Paul Rée) と共にニーチェの滞在地ライプツィヒ (Leipzig) を訪問して11月5日まで滞在した時のみであり、その後、ニーチェがザロメ（及びレー）と会うことは二度と無かった。故に、「ニーチェの性格描写についての私の草稿」をニーチェが聞きザロメと「とことん話し合った」のはライプツィヒにおいてであり、他方、ニーチェが書簡で「本当」であると認定した「私自身の性格描写」を読んだのはタウテンブルクにおいて、若しくはその直後にザロメからの現存しない書簡によって、ということになる。

勿論、「10月 (October)」という表記が「8月」の単純な誤りならば、両者は同一であ

は、「ニーチェの哲学は、概念の論理的整齊といふよりは寧ろ直接なる内的経験の表出である。あらゆる概念や思想の奥には彼の人格がい必然的な動力として活らいてゐる。」(和辻哲郎『ニーチェ研究』、内田老鶴圃、大正二年、改訂第三版再版、筑摩書房、昭和一八年、本文三頁)と述べているが、これは、ニーチェの哲学を理解する上で人格を重視する点で適切である。同様に、ベルトラムの、「これに続く個々の節は、それ故、[ニーチェの] この精神の内在的な魂の二重性をこそ、この精神の本質と価値の不確かに揺れている偉大な天秤をこそ、はっきりさせんと試みるものである」(BERTRAM, Ernst, *Nietzsche: Versuch einer Mythologie*, Georg Bondi, Berlin, 1918, siebente, durchgehend verbesserte und ergänzte Auflage, 1929, S.18.)との姿勢も、その具体的成果はともかく、ニーチェの魂に注目するその限りで、必ずしも間違いではない。

¹⁰ PFEIFFER, Ernst (Hrsg.), *Friedrich Nietzsche, Paul Rée, Lou von Salomé. Die Dokumente ihrer Begegnung*, Insel, Frankfurt am Main, 1970, S.183,184. 以下、同書は『記録』と略記し、引用・参照指示は頁数を併記してその都度行う。

る可能性もある。「序言としてのフリードリッヒ・ニーチェの一書簡」が——9月16日に作成されたと推定されてはいても——日付を欠く為、彼女が8月を10月と単純に勘違いしたようにも思われる。だが、こうした勘違いは実際には極めて不自然である。何故なら、「序言としてのフリードリッヒ・ニーチェの一書簡」には次の一節があるからである。

「どうか本当に、本当にすぐにライプツィヒへ来て下さい！一体なぜ10月2日になってからなののでしょうか？」(KSB6.260、『作品』25,299)

つまり、ザロメはこの書簡が10月2日以前のものであること、「私自身の性格描写」は更に遡ること、故にそれは「ニーチェの性格描写についての私の草稿」と異なることを自覚していた筈である。

勿論、彼女は「私自身の性格描写」と「ニーチェの性格描写についての私の草稿」とが同一である旨を先の引用(『作品』29f.)で告白しているのだから、これが彼女の牽強附会でないならば、両者は同じ趣旨だったとも言えそうである。

しかしながら、『作品』第1部にはニーチェが11月6日以降に作成した文章が多数——トーマス・プファイファー(Thomas Pfeiffer)によれば少なくとも44箇所¹¹で(同303-316)——引用元ないしは参照元とされており、同日以降の出来事を前提とする叙述も多数確認出来る。従って、「[この]仕事はあらまし、本書の第1部と第2部の若干の節とを含むものだった」(同30)とのザロメの叙述をそのまま受け取るわけには行かない。寧ろ、「あらまし(im Umriß)」との言葉が示唆する通り、相当の改稿があったことを窺わせる。

以上の事情から判断すれば、ニーチェが「本当」と認定した「私自身の性格描写」の趣旨を、完成後の『作品』からの確に指摘することは、残念ながら不可能である。

V. 「英雄的性質」

だが、『作品』の外であれば手掛かりはある。それは、タウテンブルクでザロメがレーに宛てて書いた一連の「パウル・レーの為の日記(Tagebuch für Paul Rée)」(『記録』181)であり、特に、8月18日のそれである。何故なら、そこで彼女は他ならぬ「ニーチェの性格(N.'s Charakter)」に言及しているからである。

「ニーチェの性格の内には一つの英雄的性質があります。そしてこれがニーチェにおける本質的なものなのです。この本質的なものは彼の特性と衝動の全てに特徴と総括的統一を与えているのです。」(同184)

ここでは、「彼の特性と衝動の全て」を総括する彼の「本質的なもの」が、「ニーチェの性格」の内にある「英雄的性質(Heldenzug)」であるとされている。¹²そうして、別の箇所

¹¹ これは、『悦ばしき知識(Die fröhliche Wissenschaft)』(8月末公刊)を除外した場合である。同書からの引用について言えば、ライプツィヒでニーチェがザロメに献呈した同書に書き添えた詩(Vgl. VII3[4]、『記録』458-468、『作品』169)には「1882年11月初め」・「F. ニーチェ」という日付と署名がある(『記録』241,458f.、『作品』168)ものの、既に8月20日に彼は同書を数部受け取っており、「私自身の性格描写」作成時に彼女は同書も参考に出来たのかも知れない。

尤も、そもそも「私自身の性格描写」が同書以前の彼の文書からの引用——及び以前の出来事に関する叙述——をどれほど含んでいたかは不明である。

¹² ザロメはこの2ヵ月半程前の6月4日付のニーチェ宛書簡で次の通り書いている。

「[...] 貴方方二人[レーとニーチェ]の見解を二人の人間へ体現させて考えようとした

の日記¹³には、「英雄的という言葉」や彼の「英雄主義」に関係する次の叙述がある。

「 […] 英雄的という言葉は、目標の為に自己自身に加えられた苦悩を前提としています。この苦悩は、ニーチェにあっては生そのものなのです。それは認識の為にひたすら生き続けることなのです。 […] 私はニーチェの英雄主義を、自己保存の力の内に見出します——創造者の強さを、即ち生の苦悩を或る目標の為の一手段と為す創造者の強さを繰り返し自己の内を感じるが故に生の苦悩を自発的に引き受けるところの、あの力の内にです。生の苦悩の内自己保存の力は、苦悩と悲痛を自分が克服したと感ずるのです。私は彼の英雄主義を、創造者の力の内に見ています。 […] / […]

人間が選り取る進路の如何なる価値評価も最早存在しません——しかし、力の偉大さは存在するのです。」(同 189f.)

これらの文章が9月16日以前のものであり、「ニーチェの性格」の内にある「ニーチェにおける本質的なもの」に関するものだけに、ニーチェが「本当」だと認定した「私自身の性格描写」の要点を構成している蓋然性は高い。そうして、英雄的という事柄に関する叙述は『作品』第1部にも存在するのである(z.B.『作品』46f.,51f.,56,61)。

「 […] 彼の精神の変遷の病苦に満ちた起伏は […] 自分自身との或る長く痛ましい英雄の闘争を隠している […]」(同 46)

「 自分自身の信念を進んで放棄する英雄主義においては、彼の内面におけるこの渴望

ならば、一人にはレーのエゴイストの諸性質が、もう一人には英雄の諸性質が刻印されることでしょう。」(『記録』130)

この叙述の背景には、彼女がニーチェの『教育者としてのショーペンハウアー (*Schopenhauer als Erzieher*)』を読んだ経験があると考えられる。彼は5月中旬に彼女に同書を渡し、同月30日まで貸していた(Vgl.同 126f.,260,428,472, KSB6.196)のだが、この書簡の箇所直前には、同書第4章を髣髴とさせる次の箇所がある為である。

「 […] 貴方は『幸福な人生を度外視せねばならないとしても、まだ英雄的人生が残っている』と或る箇所で言っています。」(『記録』130)

これに該当すると思しき第4章の箇所は次の通りである——但しこれは実際にはショーペンハウアーの『パレルガ・ウント・パラリポメナ』からの引用である

(Vgl.SCHOPENHAUER, Arthur, *Sämtliche Werke*, Bd.V, *Parerga und Paralipomena. Kleine philosophische Schriften. II.*, Suhrkamp, Frankfurt a. M., 1986, S.379f.) —。

「幸福な人生などあり得ない。人間が到達し得る最高のものは英雄的な人生の歩みである。」(KSA1.373)

故に、第4章を髣髴とさせるこの箇所が指すのは『悦ばしき知識』第292番だと見做すエルンスト・プファイファーの見解(『記録』429)や、当時(1882年5月)の旅行の際には『教育者としてのショーペンハウアー』を読む時間は全く作れなかったとの後年(1936年7月)のザロメの発言(同 472)は、右の両引用の類似性から判断する限り、共に誤解を招くものである。

¹³ この箇所は8月21日の日記(『記録』185-188)に続けて配されているが、その冒頭部に対し、次の註が編者のエルンスト・プファイファーにより付されている。

「定かではない枚数の紙の脱落。ここからは別の用紙。」(同 188)

「パウエル・レーの為の日記」もこの箇所で終わっている為、その正確な作成日は不明であり、そもそもこの箇所が同日記に属すこと自体が疑問視されるかも知れない。だが、本文で以下引用する内容から、この箇所がレー宛の文章であると判断出来る。そして、ザロメはタウテンブルク滞在後にレーの元に滞在している(Vgl.KSB6.246-248)ことからこの文章がレー宛の書簡ではないと考えられる為、タウテンブルク滞在中(8月7日~26日)の内、8月21日以降の日記であると推定出来る。

「＝「意見の交替や変遷の渴望」¹⁴」が信念への忠実にまさにとり代わる。」(同 47) こうした叙述と密接に関係するのが、「ルー・フォン・ザロメの為のタウテンブルクのスケッチ (Tautenburger Aufzeichnungen für Lou von Salomé)」(以下「スケッチ」と略記) と呼ばれる断章 VII1[108] (Vgl. 『記録』 211f.) の内の以下の部分——これらと殆ど同一の叙述が同時期の他の覚書にもある (VII1[88]) ——であり、これらは『作品』で英雄的という論点が叙述される際にも掲載されている (『作品』 51)。

「英雄主義——これは、自分など最早全然問題にならないような一つの目標を追求する、そうした人間の心根のことである。英雄主義は絶対的な自己没落へのよき意志なのだ。」(VII1[108]5)

「英雄的理想の反対は、全てのものの調和的発達という理想である […]」(VII1[108]6) これら一連の文章——日記・『作品』・「スケッチ」からの引用——は全て英雄的という事柄に関するものであり、そこにはおおよそで言って、或る共通点が見出される。それは、自己の調和や安定や信念を進んで拒否し、苦悩を自発的に引き受け、それにより却って自己を保持する、という態度である。先の「別の箇所の日記」にあった「自己保存の力」——「生の苦悩を自発的に引き受けるところの、あの力」、「生の苦悩を或る目標の為の一手段と為す創造者の強さを繰り返し自己の内に感じる」力、「生の苦悩の中で […] 苦悩と悲痛を自分が克服したと感じる」力——、これは、そうした英雄的態度を齎すものだろう。日記に従えば、彼女はこの力の内に「ニーチェの英雄主義」を見ている。故に、「ニーチェの性格」の内にある「ニーチェにおける本質的なもの」が「英雄的性質」であるとすれば、「私自身の性格描写」で彼女が描いたニーチェとは、自己の調和や安定や信念を進んで拒否し、苦悩を自発的に引き受け、それにより却って自己を保持する、そしてそれだけの力を有する¹⁵、その様な人間であると推定出来る。

¹⁴ この語は次の通り用いられている。

「意見の交替や変遷の渴望は、故にニーチェの哲学の心臓部に深く刺さっており、彼の認識の仕方を徹底的に規定している。」(『作品』 47)

¹⁵ 『曙光 (Morgenröthe)』完成から『悦ばしき知識』完成までの、英雄的・英雄主義に関するニーチェの諸見解に鑑みるに、それらも、本稿でのこうした英雄的性質の説明と概ね親和するものである。

「彼等 [不撓不屈・自己克服・英雄主義の徳を伴う人間達] は、自分に反して振る舞うのと同様、他人に反して振る舞う—— […]」(V 11[87])

「英雄主義とは、苦痛に耐えてしかも苦痛を加える力である。」(V 12[140])

「常に闘い (苦悩するのではなく) 苦痛を『自発的に探す』英雄主義 […]」(V 12[141])

「英雄的にさせるのは何か? ——自分の最高の苦悩と自分の最高の希望に同時に向かって行くこと。」(KSA3.519)

「大きな苦痛が差し迫っている際に […] また嵐が近付いて来る時ほど誇らしげで・好戦的で・幸福な目付きをする時が無い、そうした人間達が存在するのは本当である。いやそれどころか、苦痛そのものが当人達の最大の瞬間を与えるのだ! これが英雄的な人間達 […] なのだ。」(KSA3.550)

「それ [認識そのもの] は私にとって諸々の危険と勝利の一つの世界なのであり、そこでは英雄的な諸感情も自らの舞踏の場や活動の場を持つのだ。」(KSA3.552f.)

VI. 『作品』第1部より

そのような性格や人間像に関する叙述が、実際、『作品』第1部には他にもある。例えば、次の箇所ではニーチェによる性格区分が扱われており、先に推定された「私自身の性格描写」との共通性が窺われる——即ち、「私自身の性格描写」の内容は、次の引用中の「第一の群」に反しており「第二の群」に親和的であると解せる——。

「彼は性格の二つの大きな主要群を区別した。その様々な心の動きや衝動が互いに調和していて一つの健康な統一を形成している群と、その衝動や心の動きが互いに妨げ合い対立し合っている群である。[…] 第二の群の諸性質は、人間が万人の万人に対する闘争に際して生きるであろうと同様に、自らの内面に生きる […]¹⁶」(『作品』50) 更に、この性格区分と「彼の本質」とを結び付けた叙述もある。即ち、ザロメは次の引用でニーチェを「認識する人間」と見做している。

「つまり彼は、調和的ないし統一的な天性と英雄的ないし四分五裂の天性とを、行為する人間と認識する人間という両類型として、言い換えれば、彼の本質とは反対の類型と彼自身の類型として、区別する。」(同 52)

そして、「認識する人間」について、次の通り述べる。

「認識する人間は[行為する人間とは]全く異なる。彼は[…]自分の諸衝動をともかく出来るだけ広く分散させる。[…]それらが[…]触ったり見たり聞いたり嗅いだりする事物が多いほど、それら諸衝動は彼には自分の目的——認識という目的——に益々役立つ。彼にとっては今や『生は認識の一つの手段』(悦ばしき知識 324) だからであり、彼は自分の仲間にかう呼び掛けるからである(悦ばしき知識 319)、『我々自身が自分の実験や実験動物たろうとするのだ!』と。そうして、彼は統一としての自分自身を自発的に放棄する——彼の主体が多声的であるほど、彼には益々好ましいのだ。」(同 53)¹⁷

VII. 英雄的性質に基づく哲学——実験哲学と永遠回帰——

ニーチェの哲学がこうした彼の英雄的性質に基づくものであること、このことを彼のテクストのその全体に即してあらためて確認する作業は、ここでは行わない。とは言え、若干の重要な点に限り、以下で指摘しておきたい。

『この人を見よ (*Ecce Homo*)』の序文第3節の原型の一つとなった有名な覚書がある。これは「どの点で私は自分と等しい者を認識するか (*Woran ich meines Gleichen*

¹⁶ これに続く箇所ではザロメは、「本能と戦わざるを得ないこと——これがデカダンスの定式である」(KSA6.73)との引用を註として援用しつつ、第一の群の本性では「全く本能的に行われること」が第二の群の本性では本能的には行われないことから、前者を「生まれながらの君主的本性」(『作品』50)の側に、後者を「デカダン」の側に対応させているようである。だが、ニーチェは第二の群を第一の群より高く評価している為、この対応は不適切であり、故に、件の箇所は後年付加されたものなのかも知れない。

¹⁷ 尤も、この箇所は『悦ばしき知識』の引用を含む為、後に加筆された部分である蓋然性は低くない。故に、参考以上のものではない。だが、第一に、ニーチェは印刷直後の同書をタウテンブルクで受け取っている(註11)為、ザロメも同地でこれを読んだ可能性があり、第二に、当時の最近著たる同書に現れている考えをニーチェがザロメとの対話の際に表明したと考えるのは自然だろう。

erkenntnis)」という見出しが示す通り、ニーチェが自分や自分の哲学の言わば本来の特徴について告白したものである。

「どの点で私は自分と等しい者を認識するか。——私がこれまで理解し生きて来たような哲学とは、生存の忌々しく極悪な諸側面をも自発的に探求することである。[…]
私が生きているようなそうした実験哲学というものは […]」(VIII 16[32])

ここで彼は、自分が生きて来た哲学を「実験哲学 (Experimental-Philosophie)」と表現している。覚書に従えば、その内実は詰まるところ、生存の苦悩を伴う様々な認識を自発的に求め続けることである。つまり彼は、この覚書で、自分の哲学が英雄的性質に基づく「認識する人間」(『作品』53)の活動に他ならないことを告白しているのである。そうして覚書は、更に次の通り述べている。

「私が生きているようなそうした実験哲学というものは、試験的に、原則的なニヒリズムの諸可能性すら先取りする。だからと言って、そうした実験哲学が、否に・否定に・否への意志にとどまっているなどと言っているのではない。寧ろ、そうした実験哲学は反対のものにまで突き抜けようと欲する——在るがままの、[何かを]差し引くことや・特別扱いすることや・選別することの無い [そうした] 世界に対するディオニュソスの肯定にまで [突き抜けようと欲する] ——そのような実験哲学は永遠の循環を欲する——同一の事物を、諸々の結び目の同一の論理と非論理を [欲する]。」(VIII 16[32])
苦悩を自発的に引き受けるだけの力を伴う英雄的性質に基づくが故に、ニーチェの哲学は生存の苦悩を伴う様々な認識を自発的に求め続ける活動たる実験哲学なのであり、そしてこの実験哲学は、その苦悩を克服出来るだけの力を伴う英雄的性質に基づくが故に、否定的活動の正反対なのである。

ここで次の点を強調しておきたい。即ち、「英雄」という表現から誤解しそうになるが、ニーチェの英雄概念には、苦悩を耐え忍ぶことや、苦悩に果敢に立ち向うことは実は属さない。寧ろ、苦悩を欲し求めることが属す。だが、一般に、苦悩の欲求は「英雄」という表現には必ずしも馴染まない。寧ろ、苦悩との闘争や奮闘の方がこれに馴染む。恐らくその為だろう。後年『この人を見よ』でニーチェは、自身を「英雄的本性といったものとは反対 (der Gegensatz einer heroischen Natur)」(KSA6.294)であると述べている。だが、これは寧ろ、苦悩の欲求という在り方が彼にはごく自然なものであり、「奮闘 (Ringens)」(ibid.)では全くないということ述べたものとして理解されるべきものである。つまり、後年の彼は英雄概念を斥けたのではなく、英雄概念に「英雄」という表現を与えることを斥けたのである。

さて、先の覚書に戻るならば、「そのような実験哲学は永遠の循環を欲する」とある通り、「最も恐ろしい負担 (furchtbarste Beschwerde)」(VII 2[4])——つまりは最大の苦悩——と想定されている永遠回帰を自発的に欲することもまた実験哲学の一環に位置付けられている。つまり、『ツァラトゥストラはこう語った (Also sprach Zarathustra)』の「根本概念 (Grundconception)」(KSA6.335)である「同じものの永遠回帰 (Die Wiederkunft des Gleichen)」(V 11[141])の思想¹⁸もまた、苦悩を欲し求める彼の英雄的性質に基づく

¹⁸ 永遠回帰の思想の意味と位置付けについては、次の拙稿を参照：「ニーチェの永遠回帰の思想の意味と位置付け——断章 V 11[141]の叙述に基づいて——」(『國學院大學紀要』第

ものであると理解されるべきなのである。

実際このことは、他ならぬ 1882 年夏の覚書でも示されている。先述の通り、「スケッチ」と殆ど同一の覚書 (VII1[88]) が当時のニーチェのノートにもあるが、この覚書が属す断章群 VII1 は、彼のタウテンブルク滞在時 (6 月 25 日～8 月 27 日) の手稿を収めている。この断章群には、断章 VII1[88]の他にも、「英雄的 (heroisch)」や「英雄主義 (Heroismus)」に関する覚書が比較的多く (z.B. VII1[19][24][32][67][70][73][83]) あり、ザロメが日記に英雄的性質について記した背景にはこの概念に関する対話があったことを推測させるのだが、注目すべきは、その中に、永遠回帰と英雄的性質との連関を告げる当時の著作計画が以下の通り存在することである。

「 回帰の哲学の爲に。／準備者達の唯一の状態としての英雄的偉大さについて。／(自己に耐える手段としての絶対的没落を目指す努力。)」(VII1[70])

「 正午と永遠／一つの英雄的哲学の草案。」(VII1[83])

このように、彼自身が永遠回帰の思想を英雄的性質の現れと自覚的に見做していたことを、これら当時の著作計画は示しているのである。

VIII. 英雄概念の意味と位置付け

ここまでで本稿は、ニーチェ哲学の基盤が人間ニーチェの、苦悩を欲し求め、自発的に苦悩を引き受けんとする英雄的性質に求められるべきことを導出し、それが実験哲学や永遠回帰という主要な主題に妥当することを指摘した。筆者は他の主要な主題もこの英雄的性質を基盤に据えてこそ適切に理解出来ると考えるが、この点は示唆に止めざるを得ない。

ところで、以上の議論に対し、疑問を二点提示すると共に応答もしておきたい。一点目は言わば研究者向きの疑問 (VIII) で、二点目は言わば一般人向きの疑問 (IX) である。即ち、ニーチェの言わば「英雄好み」は夙に有名なものではないのかという疑問と、ニーチェの英雄的性質の話が我々とそもそも何の関係があるのかという疑問である。

まず一点目について。確かに、例えばクルンメル (Krummel) によるニーチェ関連文書の目録・紹介¹⁹からも確認出来る通り、ニーチェについて語る際に「英雄 (Held)」・「英雄的 (heroisch / heldenhaft / heldisch)」・「英雄主義 (Heroismus)」等の語が使用されるケースは散見される。だが、そこでは大抵の場合、それらの語は意味が曖昧なまま使用されており、故に、英雄好みとは結局何を好むことなのかとの問いについて、やはり曖昧なままである。本稿では、英雄好みとはつまりは苦悩を好むことであるとの観点を提示した。これに対し、件の目録・紹介を見る限り、件の語の意味を——苦悩を単に耐え忍ぶことではなく、また苦悩に果敢に立ち向うことでもなく、寧ろ——苦悩を欲し求めることとして明示したケースは、管見の限りでは発見出来なかった²⁰。この点は『作品』も同様である。

ヴァイヒェルト (Weichelt) の例²¹等もあるものの、英雄という語をニーチェ解釈に用

50 巻、國學院大學、49-64 頁、2012 年)

¹⁹ KRUMMEL, Richard Frank, *Nietzsche und der deutsche Geist*, in 4 Bänden, Walter de Gruyter, Berlin / New York, 1974ff.

²⁰ 但し、これを明示はしないが含意はするかも知れないケースとしては、ブースマン (Susman)、レウコヴィッツ (Lewkowitz) の例が挙げられる: KRUMMEL, a.a.O., Bd. 2, 2., verb. und erg. Aufl., 1998, S. 621, Bd. 3, 1998, S. 124.

²¹ WEICHELDT, Hans, *Nietzsche, der Philosoph des Heroismus*, Baustein, Leipzig,

いたものとして有名なのはボイムラー (Baumler) であろう。彼が為した「英雄的現実主義 (heroischer Realismus)」という定式化は、ニーチェの遺稿集『生成の無垢 (Die Unschuld des Werdens)』やクレーナー (Kröner) 版全集の編者としての彼自身の影響力や彼の著作の影響力も相俟って、ニーチェ哲学と英雄概念との連想に比較的強い影響を与えていったと確かに考えられる。だが、第一に、この定式化はニーチェの実践的態度に対するものではない。それは、世界とは「生成 (Werden)」即ち「闘争と勝利 (Kämpfen und Siegen)」であるという、彼が見做す限りでの「ニーチェが見た世界像 (das Bild der Welt, das Nietzsche geschaut hat)」・「世界観 (Weltansicht)」に対する定式化である。²²勿論これは、世界を所謂「力への意志 (Wille zur Macht)」として扱ったニーチェの議論を受けていると見做してもよいのかも知れない。だが、仮令そうだとしても、苦悩の欲求としての英雄概念は、少なくとも第一義的には、彼の世界像や世界観にではなく、寧ろ彼の実践的態度や人格にこそ該当するというのが、本稿の立場である。また、第二に、以下に引用するボイムラーの別の著作の叙述からも窺われる通り、そもそも彼は英雄概念を苦悩の欲求としては理解していないようである。

「ニーチェにあつては苦悩のペシミズムや救済のペシミズムではなく、寧ろ強さのペシミズム、行為のペシミズムが、真実かつ根源的である。このペシミズムだけが、彼が有する、人間のディオニュソスの構想の英雄的=悲劇的な根本性質に相応しいものである。」²³

とは言え、ニーチェの実践的態度を苦悩の欲求として理解する観点は、例えば「強さのペシミズム (Pessimismus der Stärke)」(KSA1.12) や「ディオニュソスのペシミズム (dionysischer Pessimismus)」(KSA3.622) への注目という仕方、内容的には既知のものともあるいは言えるのかも知れない——但し、この点については、先のボイムラーのように、「強さのペシミズム」に注目しながらもこれを苦悩の欲求としては理解していない例も窺われる為、注意が必要である——。また、ニーチェ解釈における英雄概念の重要性を指摘する例も、ニーチェの生と教説の「道徳的核心 (sittlicher Kern)」として「苦悩と病気に対する英雄的闘争 (der heroische Kampf gegen Leiden und Krankheit)」を強調するケーニッヒ (König) や、英雄主義をニーチェの「根本的立場 (Grundposition)」と見做すプファイル (Pfeil) に、確かに確認出来る²⁴——但し、その場合、英雄概念の意味内容については注意が必要である——。だが、強調したいのは、複数の仕方、表現されるこうした観点がニーチェ哲学で重要な地位を占めることや苦悩の欲求としての英雄概念が彼の哲学の言わば主軸に据えられることは、人格の反映としての思想という、そして彼の人格としての英雄的性質という、他ならぬ彼自身がお墨付きを与えた論点によって根拠付けられるということである。言い換えれば、強さのペシミズムやディオニュソスのペシミズムはそれがニーチェの英雄的性質に由来する実践的態度であるからこそ、また英雄概念は英雄的性質が彼の人格であるからこそ、そして何より、こうした観点が彼自身の観点であ

1924.

²² 本段落におけるここまでの引用は、いずれも次の箇所からである：BAEUMLER, Alfred, *Nietzsche der Philosoph und Politiker*, Reclam, Leipzig, 1931, S.15.

²³ BAEUMLER, Alfred, *Studien zur deutschen Geistesgeschichte*, Junker und Dünhaupt, Berlin, 1937, S.256.

²⁴ KRUMMEL, a.a.O., Bd.1, 2., verb. und erg. Aufl., 1998, S.472, Bd.3, 1998, S.714f.

るからこそ、彼の哲学における特権的な重要性が保証されるのである。²⁵

IX. 運命の是認の問題

では二点目はどうか。ニーチェの英雄的性質の話がそもそも我々と何の関係があるのか。筆者は運命の是認という、人間一般にとっての問題に注目したい。²⁶我々人間は運命に翻弄される。現実に対する様々な努力にも拘らず自分の思い通りにならないのが人生である。そのような人生に納得するのが困難な者もいるだろう。その際、彼の哲学が少しは参考に出来るかも知れない。何故なら、彼は運命を愛することについて語っているからである。

ニーチェがザロメと「とことん話し合った」頃に公刊された（註 11、17）『悦ばしき知識』の 276 番には次の一節がある。

「私は事物の必然的なものを美と見做すことをますます学ぼうと思う。——そうして私は事物を美しくする者達の一人となるだろう。運命愛（amor fati）、これが今から私の愛であれ！ […] いつの日か私は一人の肯定者（Ja-sagender）になろうと思うのだ！」（KSA3.521）

²⁵ では、何故人格という論点が注目されるべきなのか。哲学解釈では哲学の内容それ自体が注目されるべきであり哲学者の人格は寧ろ度外視されるべきである、との見解の方が通例だろう。また確かに、哲学することにおいては他人の哲学は参照・利用の対象であり、その限り、理解の対象であり得ると共に解釈の対象でもあり得る。そして、哲学解釈では解釈者の観点が存在し、それを尊重する限りで哲学者の観点は制限されて構わないし、哲学者の人格も度外視されて構わない。更に言えば、哲学解釈の方が元の哲学よりも実り豊かな側面を含む場合も少なくない。しかしながら、哲学解釈ならぬ哲学理解に際しては哲学者の観点が尊重されるべきであり、故にニーチェ哲学の理解に際しては彼の観点が尊重されるべきである。そうして、彼に従えば、思想を扱う際に人格の論点は重要なのである。

だが、人格という論点が重要である理由はそれだけではない。この論点が重要なのは、それが、各人の認識や行為を根底で司る価値観が何故現状のようになっているのかという、その傾向性を説明するものだからである——これについては次の拙稿も参照：「ニーチェ哲学における知と美の地平を巡って」（『國學院雑誌』第 111 巻第 11 号、國學院大學、32-43 頁、2010 年）——。つまり人格とは各人のありようを決定する地位にある。故に、人格という主題にはニーチェの見解とは独立に内容それ自体の重要性が認められると考えられる。

また、ニーチェ哲学の枠内でも人格という論点は重要である。今述べた通り、人格は各人の価値観を言わば定めるものであり、故に人格の問題は、例えば、『ツァラトゥストラはこう語った 第三部』完成後に中心的な主題になっていった「価値転換（Umwerthung）」（VII26[259], u.s.w.）にも関係している。即ち、彼の人格が英雄的性質であることは、苦悩を高く評価する価値観を彼に齎しており、そしてこの価値観が、価値転換により実現されるべきものとして彼により注目されたのである（なお、価値観が注目されたのは、それが各人の認識や行為を司っている為である）。このように、本文で言及した実験哲学や永遠回帰のみならず、例えば価値転換という彼の哲学の重要な主題もまた、彼の英雄的性質に基づいているのであり、このことは、彼の哲学は苦悩を欲求する英雄的性質に基づくと思做す本稿の見解を補強するものである。

なお、本節（VIII）の本文第 4 段落で述べた、力への意志としての世界観について付言すると、これは、苦悩を高く評価する価値観こそが本来生存にとって高い価値を有するものであることを示す作業の一環として展開されたものであると——故に、例えばボイムラーやハイデガーのように、解釈者にとってはニーチェ哲学における第一義的な重要性を持ち得るが、しかしながらニーチェ自身にとってはそうではないと——筆者は考える。

²⁶ 本節（IX）——及び次節（X）——の問題意識は、次の拙稿のそれと繋がっている：「肯定についての試論」（『研究紀要』第 15 号、星城大学、29-41 頁、2015 年）

そして、この公刊から6年余り後に執筆された、『この人を見よ』の一節にはこうある。

「人間の偉大さに対する私の定式は運命愛である。[現実とは]別の何物も持とうと思わないこと。前にも、後ろにも、永遠に。必然的なものに単に耐えるのではなく、ましてやそれを隠すのではなく […]、寧ろ愛すること…」(KSA6.297)

「必然的なものは私を傷つけない。運命愛は私の内奥の本性なのだ。」²⁷ (KSA6.363)

更に、これと同年(1888年)に書かれた、Ⅶで引用済の断章のその続きにはこうある。

「——そのような実験哲学は永遠の循環を欲する——同一の事物を、諸々の結び目の同一の論理と非論理を[欲する]。哲学者たる者が到達出来る最高の状態、[それは]生存に対しディオニュソス的事であること[である]——。これに対する私の定式は運命愛である…」(Ⅷ16[32])

これらの引用からこう言えそうである。嘗てニーチェは運命という必然を愛する境地にはいなかったが、実験哲学を重ね、これを「内奥の本性(innerste Natur)」とするまでに至り、永遠回帰を欲する者、従って運命を愛する者となった、と。すると我々も、彼と同様、実験哲学を重ねた末に、自分の思い通りにならない人生を愛することが可能になる…

だが、実際はそう簡単にはいかない。Ⅶで見た通り、ニーチェの言う実験哲学は英雄的性質に基づくからである。それ故、英雄的性質をそもそも自らの人格とはしない者、言い換えればニーチェと等しくはない者にとって、ニーチェの例は寧ろ参考にならない²⁸。ニーチェと同様の方法で運命愛の境地に至る為には、苦悩に耐えるのではなく苦悩を欲し求める——しかも反動的な仕方(例えば『道徳の系譜学(Zur Genealogie der Moral)』の第三論文で描かれる禁欲主義の仕方)ではない仕方——ことが出来るだけの十分な力を人格として必要とするのである。するとやはり、思い通りにならない人生をそれにも拘らずというのではない仕方で愛するには、ニーチェの道は狭き門ではないか。ニーチェの方法は、十分な力があれば我々は思い通りにならない運命でも愛することさえ出来ると示唆する点では参考になる。だが、事実上は参考にならない。ニーチェの愛は力を、しかも人格において、必要とするからである。この点に限界がある。

とは言え、だからと言って、全く参考が出来ないと断ずるのも拙速だろう。何故なら、ニーチェが英雄的性質に基づく実験哲学を重ねることで運命愛を「内奥の本性」とするまでに至ったように、我々もひょっとしたら、まずは英雄的性質に基づかない仕方で実験哲学を試みることで、自分の現状の力に見合った程度までは、英雄的性質を人格に出来るかも知れないからであり、そしてその上で、その程度だけは英雄的性質に基づく実験哲学を重ねることで、徐々に力をつけていき、それに見合った程度までは運命を是認出来るようになるかも知れないからである。²⁹もしもそうならば、少しは参考が出来ると言ってよい。

²⁷ この一文とほぼ同じ表記が『ニーチェ対ヴァーグナー(Nietzsche contra Wagner)』のエピローグにもある：「運命愛、それは私の内奥の本性なのだ。」(KSA6.436)

²⁸ 清水氏は次の論考で、これと同様の立場を表明している：「ニーチェは健康な人間の作り方を教えるか」(『理想』684、理想社、31～41頁、2010年)。

²⁹ 清水氏の前掲論文(註28)の見解では、ニーチェ自身はこの試みの可能性を否定している。即ち、彼と等しくない者が彼と同じようになる方法を提示してはいない。それどころか、そのような方法が存在することに否定的である。但し、そうだとすると、各人が彼と等しいかどうかは予め分かるわけではないのも確かであり、故に、試みる意味はある。

X. 他の道についての若干の覚書——結論に代えて——

英雄的性質を人格とする者には運命愛への道が開けている。そうでない者にも、その力に見合う程度のもは期待出来るのかも知れない。だが、力弱き者には厳しい道である。

では、他の道は無いのだろうか。ある。例えば、解釈という仕方では物の見方を変え苦悩を軽減するというやり方である。³⁰ニーチェはこれを、弱者向きの方法と見做している。例えば『道徳の系譜学』の第一論文で描かれる奴隷道徳のやり方もこれに該当するだろう。但し、解釈はこれを信じる事が出来る限りでは機能するが、他の解釈と時に対立する。更には、これと矛盾する事実認識や学的態度により否定され得る。ここに弱みがある。³¹

では、事実認識や学的態度と親和的な道ならどうか。即ち——実験哲学の一環としての認識は措くとして——物事の成り行きの必然性を認識するという道である。³²単なる解釈ならぬ認識は真としての力を帯びるだけ解釈よりもブレ難く、その点で力をより要さない。しかも、偶然や自由選択も含めての必然の運命であると見做すことも不可能ではない。³³

とは言え、こうした認識の道も運命の是認に至るには相応の力を要する。一つには、感情が逆らうからである。³⁴また、それ以前に、世界の成り行きは必然的ではないという見方も学的態度として可能だからである。³⁵その場合、必然性の認識も、認識というよりは寧ろ一個の解釈に過ぎないということになり、感情とは別の点で努力を要することになる。

そこで、最後に、別の或る可能性に触れておきたい。それは、愛による運命の是認の可能性である。勿論、運命愛については既にIXで扱っている。しかし、注意したいのは、運命に対するニーチェの「愛 (amor)」は力に基づいていたということである。けれども、それでは、およそ運命に対する愛というものは力に基づくのだろうか。言い換えるならば、力に基づかない仕方では運命を丸ごと愛することは不可能なのだろうか。

³⁰ これは大小様々な仕方で我々が日常的に行っているものでもあるが、ここでは「大」の代表的一例として死後の世界の設定を挙げておきたい。多くの宗教的言説の前提である。

ニーチェからは離れるが、森三樹三郎氏によれば、東晋時代の中国で仏教が急速に広がった主な理由の一つは、現世のみを扱う儒教では合理的に解釈出来なかった理不尽な運命を前世と来世の存在を前提とする仏教の「三世報応の説」・「輪廻説」という考え方が解決出来たからである（『中国思想史（下）』、レグルス文庫、第三文明社、1978年、282頁以下、『老荘と仏教』、講談社学術文庫、講談社、2003年、124頁以下）。これは世界史上の実例として注目すべきことと思われる。

³¹ なお、註30で述べた死後の世界は、学的態度を以てしても不在証明が事実上不可能であろう点で、よく出来ている。尤も、細部の描写の荒唐無稽さは指摘出来るだろうが。

³² 必然性の認識への着目については前掲の拙稿「肯定についての試論」でも触れている。

³³ 藪田宗人氏はニーチェにもそのような見解が見受けられることを記している（大石紀一郎・大貫敦子・木前利秋・高橋順一・三島憲一（編集）『ニーチェ事典』、弘文堂、1995年、項目「運命への愛」、41頁）。

³⁴ 感情の厄介な受動的性質については次の拙稿でも触れている：「ハラスメントの概念を問い直す——嫌がらせと人権侵害という観点から——（下）」（『研究紀要』、第17号、星城大学、39-45頁、2017年）

但し、松永澄夫氏は感情が受動的存在に尽きないことを論じている（『感情と意味世界』、東信堂、2016年、第2章）。これに従えば、感情も或る程度は対処可能ということになる。

³⁵ 哲学史上最も有名なのはヒューム（Hume）による因果性批判であろうが、ヒューム研究者でもある一ノ瀬正樹氏はその議論も紹介しつつ、自身の主張として因果の非存在を論じている（『英米哲学入門——「である」と「べき」の交差する世界』、ちくま新書、筑摩書房、2018年）。

愛を主題的に扱うこと——このことはしかし、ニーチェの英雄概念に焦点が定められた本稿の範囲を既に超えている。また、問いを扱う為には、力の意味について改めて考えることも併せて求められるだろう。更に、運命の是認という問題意識から言えば、愛が如何なる仕方での是認なのかについて考えることもまた同様である。

故にここでは、根拠を伴わせないままではあるが、別の機会の為に、「力に基づかない仕方での、愛による運命全体の是認」という着想を残しておくにとどめたい。³⁶

参考文献³⁷

- 1) MIDDLETON, Christopher (ed. and trans.), *Selected Letters of Friedrich Nietzsche*, The University of Chicago, 1969, reprinted by Hackett Publishing Company, Inc. Indianapolis / Cambridge, 1996.
- 2) 清水真木『知の教科書 ニーチェ』、講談社、2003年
- 3) ANDREAS-SALOMÉ, Lou, *Friedrich Nietzsche in seinen Werken*, Konegen, Wien, 1894, mit Anmerkungen von Thomas PFEIFFER, herausgegeben von Ernst PFEIFFER, Insel, Frankfurt am Main und Leipzig, 2000.
- 4) HEIDEGGER, Martin, *Nietzsche*, Bd.1, Neske, Pfullingen, 1961.
- 5) JASPERS, Karl, *Nietzsche: Einführung in das Verständnis seines Philosophierens*, Walter de Gruyter, Berlin, 1936, dritte unveränderte Auflage, 1950.
- 6) MÜLLER-LAUTER, Wolfgang, *Nietzsche: Seine Philosophie der Gegensätze und die Gegensätze seiner Philosophie*, Walter de Gruyter, Berlin / New York, 1971.
- 7) FINK, Eugen, *Nietzsches Philosophie*, Kohlhammer, Stuttgart, 1960.
- 8) 和辻哲郎『ニイチェ研究』、内田老鶴圃、1913年、改訂第三版再版、筑摩書房、1943年
- 9) BERTRAM, Ernst, *Nietzsche: Versuch einer Mythologie*, Georg Bondi, Berlin, 1918, siebente, durchgehend verbesserte und ergänzte Auflage, 1929.
- 10) PFEIFFER, Ernst (Hrsg.), *Friedrich Nietzsche, Paul Rée, Lou von Salomé. Die Dokumente ihrer Begegnung*, Insel, Frankfurt am Main, 1970.
- 11) BAEUMLER, Alfred, *Nietzsche der Philosoph und Politiker*, Reclam, Leipzig, 1931.
- 12) BAEUMLER, Alfred, *Studien zur deutschen Geistesgeschichte*, Junker und Dünhaupt, Berlin, 1937.
- 13) KRUMMEL, Richard Frank, *Nietzsche und der deutsche Geist*, in 4 Bänden, Walter de Gruyter, Berlin / New York, 1974ff.
- 14) 森三樹三郎『中国思想史（下）』、レグルス文庫、第三文明社、1978年
- 15) 森三樹三郎『老荘と仏教』、講談社学術文庫、講談社、2003年

³⁶ なお、以上のもの以外の道も考えられる。例えば、空を体得し、自我を滅し、執着を離れるという仏教的な道である。勿論、これもまた容易ならぬ道であろう。

³⁷ 執筆要綱に従い、引用を伴わず言及のみ行った文献はここには記載しなかった。記載順も要綱に従った。また、ニーチェのグロイター版テキストは註の冒頭の記載に代えた。

